

巻頭言

2013年日本作業療法学会にむけて

(社)大阪府作業療法士会 副会長 茂原 直子

(大阪発達総合療育センター)



皆さま、新年あけましておめでとうございます。

理事会報告でもあげられたように、2013年度日本作業療法学会の大阪開催が検討されています。非常に大きな事業になりますので、予算や事業計画など、会員に負担をかけないように効率のよい計画を立てるため、考えなくてはならないことがいろいろあります。早めから準備を開始したいと考え、次年度の宮城学会での承認を得て正式に準備が始められるようにしたいと考えています。何よりもせっかく大阪の地で学会が開催されるのならば、大阪の作業療法の水準を高め、大阪府民にも、作業療法を紹介できるような機会になるようにと願っています。そしてそれができそうな府士会活動にしていきたいと思えます。

もともと、大阪の作業療法は独自の文化をもって発展してきました。リハビリテーションという言葉自体、大阪市立大学の水野祥太郎先生が導入されたものと伺っています。長社会長が勤務されていた大阪府立身体障害者福祉センターでは、いち早く欧米の情報を収集し、数々の障害者地域医療の先駆者を排出し、当時としては最先端で独創的な機器や手法が生み出されました。発達の領域でも、ボイタ法やポバース法といった脳性まひの早期治療・早期療育が始められた施設があり、そこで作業療法士が果たしてきた役割も大きなものになっています。この機会に大阪の作業療法の歴史を紐とき、みなさんが行っている作業療法は、大阪の障害をもつ方々の生活支援や、府民の健康のた

めに発展してきたことを再確認しませんか?目の前の利用者の方々とともに作り上げてきた作業療法は、全国的に見ても個性的でユニークな活動となっているのではないのでしょうか。その貴重な資料や財産を改めて見直し、これからの大阪の作業療法を構築していくきっかけになればと考えます。

インフルエンザなどに対する危機管理の観点からも、講師や座長などは大阪近辺の人材で開催できるようにすることが望ましく、また、有名な講師を呼ぶような教育講演よりも、発表内容についての議論が十分できるような真に学術的な内容の高い学会にすることも期待されています。大阪の臨床家・教育者・研究者が総力を結集すれば、すばらしい学会が開催できるのではないのでしょうか。そして、そのことを中期目標として、我々の活動を高めていきたいものです。

どのように進めていくか、何を取り上げていくか、私たちに何ができるか、今の大阪の作業療法の現状を見つめなおし、多くの会員の声を聞き、府民にも認知されるような学会になるように、府士会活動についても、私たちが専門家として本当にやらなくてはならないこと、また、府民に知ってもらいたいことやその方法、また、勤務をしながら行う活動をどのように運営していくべきなのか、作業療法士という専門職の真価が問われることだとも思うので、ぜひ、知恵を出し合ってその日を迎えられるたと願います。多くの会員の積極的な声や、参加をお待ちしています。